

2020年 富田林市立図書館から 5年生・6年生のみなさんへ



夏のおてがみ

さあ、夏だ！毎日暑いけれど、図書館は涼しいよ。借りたくなるような本をたくさんそろえて待ってるよ。ぜひ、来てね。

『しろくまきょうだいのセイウチまつり』

庄野 ナホコ／作 小学館

しろくまきょうだいのトーリヤとパーフカがとっても楽しみにしているセイウチまつり。おまつりの日、妹の赤ちゃんくまが熱をだしてしまったので、おまつりにつれていってあげられないとお母さんは言いました。どうしても行きたい二人は、お母さんにないしょで、かばんにおやつとおこづかいを入れ、出かけてしまいます。



『おひめさまになったワニ』

ローラ・エイミー・シュリッツ／さく
ブライアン・フロッカ／え 中野 怜奈／やく
福音館書店

コーラひめの毎日は女王になるための修行ばかりでした。王さまと、おきさきさまと、お世話がかりは、とてもきびしい人たちでした。遊ぶのも犬を飼うのもゆるしてもらえません。悲しくなったコーラひめの目の前にあらわれたのは1匹のワニでした。ワニはコーラひめの代わりにおひめさまをしてくれると言いますが、うまくいくでしょうか。



『名字ずかん』

森岡 浩／監修 長谷川 未緒／編著 ほるぷ出版

生まれたときからあるけれど「名字」についてみなさん知っていますか。名字ってどういうものなのか、由来を知るにはどうすればいいのか。名字のルーツを知ることで、日本の文化や歴史についても学ぶことができます。また「名字ランキングトップ500」も紹介しているので、自分の名字が何位なのか調べてみるのも楽しいですよ。



『しずかな魔女』

市川 朔久子／著 岩崎書店

不登校の瀬尾草子は朝から図書館で過ごしている。ある日、司書の深津さんが「しずかな子は、魔女に向いている」というメモをお守りとして草子に渡してくれた。気になった草子は、その文章が出てくる本を探してもらおうと図書館に依頼を出した。やがて、深津さんから紙の束を渡され、そこには少女たちの物語が書かれていた。



『曲げわっぱ』

瀬戸山 玄／文・写真 岩崎書店

曲げわっぱは秋田県大館市の伝統工芸品で、うすい杉の板を丸く曲げたふた付きの容器です。納得いくものを作るために長い年月修行した名人と職人たちが、丁寧な仕事ぶりやものづくりに対するまっすぐな気持ちは使う人にもきっと届くでしょう。大館にある「わっぱビルヂング」では世界の曲げわっぱを見ることができます。



『明日のランチはきみと』

サラ・ウィークス／著
ギター・ヴァラダラージャン／著
久保 陽子／訳 フレーベル館

インドからアメリカに転校してきたラビ。優秀だった自分は当然、新しいクラスでも通用すると思っていた。なのに実際は何一つ認めてもらえない。おまけにお昼のランチでは気になるクラスメイトと一緒にいたいのに、なぜか真逆の相手が目の前に座っている。決めつけて気に入らないその相手は本当に嫌なヤツなんだろうか。



『落語ねこ』

赤羽 じゅんこ／作 大島 妙子／絵
文溪堂

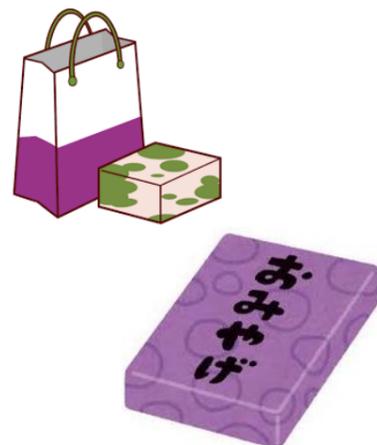
おじいちゃんがしばらく入院することになり、おじいちゃんが飼っている猫のクマハチを、しばらく七海の家で預かることになりました。クマハチは、とても太っていて、あいきょうのある猫です。おじいちゃんは、「クマハチにどんな秘密があってもおどろかないように。」とみょうなことを言いました。クマハチの秘密とはなんでしょう？



『日本全国おみやげ図鑑 西日本編』

フレーベル館

都道府県の地図、歴史、工芸品、おみやげを、写真でたくさん見ることができます。大阪府といえば、江戸時代のころから多くの芝居小屋や料理屋が並ぶ通りで栄えた道頓堀。「くだおれ太郎」のグッズがたくさん紹介されています。ほかに日本全国のおもちゃや、ご当地キャラクターも楽しめます。(シリーズに東日本編もあり)



『おしえてフクロウのひみつ』

柴田 佳秀／文 マツダ ユカ／絵
子どもの未来社

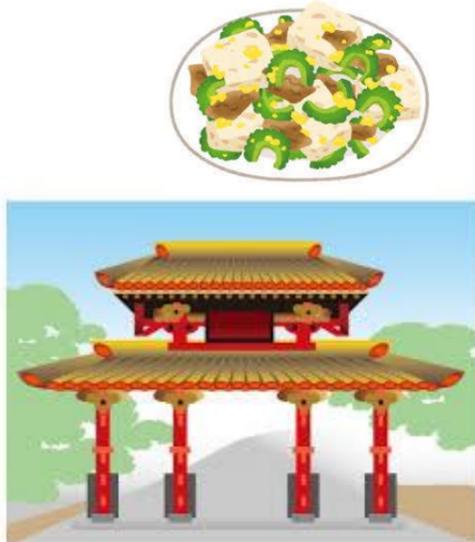
絵本や物語にでてくるフクロウを見たことはある？意外にも、野生のフクロウは近くの神社の森にすんでいるんだ。フクロウは夜おきていて、音をたてずに飛ぶから人にはわかりにくい。なぜ夜に行動するのかなど、たくさんのおしえてくれるよ。さあ、この本でフクロウの世界をのぞいてみよう。



『琉球という国があった』

上里 隆史／文 富山 義則／写真 一ノ関 圭／絵
福音館書店

沖縄県は、かつては日本の領土ではなく、「琉球」という独立した国でした。琉球は中国大陸の影響を受けつつ、独自の文化を築てきましたが、やがて日本の支配下に置かれることとなります。ここでは、琉球に王国が誕生してから沖縄となって日本の一部となまでを追います。琉球のたどった道が鮮やかに浮かんでいきます。



『絵本江戸のたび』

太田 大輔／作 講談社

むかし、東京はまだ「江戸」とよばれていたころには、車や新幹線のような便利な乗り物はありませんでした。むかしの人たちはどうやって旅をしていたのでしょうか。東京に1000年前から住んでいる妖怪小僧ならいろんなことを教えてくれそうです。江戸時代の旅の方法や、くらしの様子をいっしょにのぞいてみましょう。

『池の水をぬいた！ため池の外来生物がわかる本』

加藤 英明／文 徳間書店

日本に池っていくつあるのかな？西日本に多く、なかでも兵庫県がトップで、4万以上もある。農作業の発達で、川から遠い場所でも池があれば田んぼに水がひける。池の作り方から、農耕文化、かいぼり漁にふれて、「在来生物」と「外来生物」について加藤先生がわかりやすく教えてくれます。外来生物の迫力ある写真を見よう。

